

< 巻 頭 言 >



最 近 思 う こ と

金 澤 真 一*

早いもので昨年3月11日の東日本大震災より一年が過ぎました。被災された方、また避難されておられる方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、いろいろな立場で復旧、復興作業に当たっておられる方々のご苦勞に頭の下がる思いです。

ダムの管理においては今回の震災で河川管理上支障になる大きな被害はありませんでしたが、地震応答特性などの観測データによりいろいろな知見が得られ、課題もいくつか明らかになっており、今後のダム建設と管理に役立つことと考えます。

さて、我々建設業界は災害発生直後より福島第一原子力発電所の緊急対応へ、あるいは岩手県、宮城県への緊急物資の供給支援に組織を挙げ対応してまいりました。現在は残された膨大な量のがれきの処理、福島の放射線汚染地区の除染が喫緊の課題となっております。これらの作業は大量の人員や重機を動員する機動力が必要とされ、また、それを維持するロジステックが求められます。このような大きな組織を臨機応変に動かせるのは我々建設業界でしかない、使命感を持ち全国レベルで経営資源を投入し臨んでおります。そのような折、ある週刊誌が「被災地に群がるゼネコン」という見出しで特集記事を組んでおり、「復興バブル」という表現も使っていました。どうして「被災地復興で頑張るゼネコン」とか「被災地復興にゼネコンの力を」といった表現にならないのか歯がゆい思いです。震災復興に全力で取り組むことにより、「無駄な公共工事」、「公共工事で儲けるゼネコン」、「ダムはムダ」など公共工事やゼネコンへのマイナスのイメージを払拭するとともに、マスコミには一生懸命に災害復旧に取り組んでいる本当の姿を是非報道して頂きたいものです。

もうひとつ歯がゆく思うことは福島第一原子力発電所の事故以来、再生可能エネルギーが話題に上がっていますが、太陽光発電、風力発電が主で、水力発電ということが話題に出ていないことです。水力発電は重力エネルギーを電気エネルギーに変えるもので水路に水を通し水車を回せばよいわけで、

* (株)間組 副社長

水を使ってしまうものでも汚すものでもありません。水車を回し発電に寄与した水は元の河川に戻り流下して行き、落差さえあれば同じ水系で何度でも発電できます。太陽光発電や風力発電に比較して安定した良質の電気を効率良く供給できるといった面で優れています。先日、ある太陽光発電のサイトを見る機会がありました。約5万平方メートルもの広大な土地を造成し最大可能発電量3,000kW とのことでしたが、残念ながら天気は快晴なのにパネルには雪が薄っすらと凍りつき発電量0でした。こういったことを考え合わせると水力発電は再生可能エネルギーの話題でいの一歩に出てきてしかるべきものと考えます。

さらに水力発電には新規開発だけでなく、現在の設備の更新と発電効率の向上、放流の有効利用、ダムの再開発による発電容量の増加、ダム ESCO 事業など既存のダムを活用するいろいろな選択肢が考えられます。特にダムの再開発などはすでに一部始まっておりますが、低炭素型の純国産エネルギー確保の一端として産官学を挙げての取り組みを切に願います。ダムをつくり発電所を建設してきた技術者としては、もっと世の中の目が水力発電に向けてほしいと願います。

昨年の震災、豪雨災害などをうけ、防災という面からも公共工事の必要性が改めて再認識され、象徴的なキャッチフレーズの「コンクリートから人へ」は「コンクリートも人も」とか「人のためのコンクリート」と少しずつ変化してきております。やはり必要な社会インフラは必要との考えが広まり、定着してきているのかと思います。このような機会にダム事業に携わる我々は、それぞれの立場で出来ることからダムと水力発電の有用性をひろめていかなければならないと考えます。

さて、本年6月上旬には「ICOLD2012京都」が開催され、それに向けての準備も着実に進んでおります。JCOLD もこの年次例会、大会の成功に向けて坂本会長はじめ皆様が最大限の力を注がれているとのことですので、我々も積極的に参加して行く所存です。現在、国内では建設中のダムサイトが少なく、海外からこの大会に参加される方々には管理運営されているダムを主に視察していただくことになるのが多少残念ですが、この大会が成功裏に運営され、クリーンな再生可能エネルギーを産みだすダム建設事業が今後、スピード感を持って進むことを祈念致します。